

2 道徳性の基盤とその発達

(1) 基本的な信頼関係と生活のリズム

対人的な志向性（他者との基本的な信頼関係を求める欲求）

- ・ 養育者とのやり取りを通して、生活のリズムを身に付けていく。
- ・ 養育者との様々な交流によって心のつながりができる。
- ・ 後にいろいろな人々と社会生活を行う上で必要なルールに合う行動をとることにつながっている。

乳児期：乳児を保護し欲求への充足を助けるだけのかかわり

幼児期：自ら適切な行動がとれるように働き掛けるかかわり

（社会化の開始としてのしつけが始まる）

大人は、まず危険な行為を制止し、生活習慣を身に付けるようにしつけをしようとする。

大人が示す制止や自分の行動に対する対応から、「してよいこと」「してはいけないこと」を漠然と感ずるようになる。

(2) 自他の分化と反抗期

子どもは知的・社会的に発達するにつれて自他の分化が進み、自分の意志がはっきりしてくる。

しつけによって自分の欲求を抑えることを学ぶと同時に、自分は養育者とは異なった存在であり、養育者とは異なった意志をもつことが意識される。また、自己意識が高まることで、反抗期が始まる。自分の行動を調整するには、自己主張と自己抑制の二つの面が必要であるが、しつけの意味は、その両面を促進し、調整させていくことにある。

